探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：宮島中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
宮島小学校	８	８９
宮島中学校	４	３８

（R3.11.1現在で記入）

１　指導上の課題

生活科・総合的な学習の時間についての課題，児童生徒実態から指導上の課題を次のように捉えた。

・地域の文化や歴史等に関する学習内容が固定化し，課題に対して受動的に取り組む傾向がある。
・少人数集団の中で，他者と協働的に取り組んだり，批判的に取り組んだりする経験が少ない。
・学習成果を有効に生かしたり，新たな課題につなげたりする場や効果的に発信する場が少ないため，自己有用感を感じにくい。

２　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

宮島を誇りに思い，宮島の未来を創る児童生徒の育成～９年間のつながりを意識した持続可能な学習体系づくりを通して～

生活科・総合的な学習の時間におけるカリキュラム構築を通して，宮島を誇りに思い，宮島の未来を創る児童生徒を育成するための探究的な学習となる単元開発及び指導方法を研究する。

（２）資質・能力の設定について

本校の描く，９年間の学びを終えた１５歳の生徒像「宮島のことを系統的に学び，宮島の未来を考えるとともに，自分自身を見つめ自分の将来を具体的に考え行動する子ども」に迫るために必要な資質・能力を話し合った。そして，学習指導要領に示されるすべての教科等で育成を目指す資質・能力の３つの柱に照らして絞りこみ，次の３つに整理した。

・おもてなし力（知識及び技能）・宮島のことを地域の願いとともに深く理解し，伝えたい内容を構築していく
・伝える力（思考力・判断力・表現力等）・身に付けた知識・技能を活用し，相手や目的に応じて他者に伝えていく
・見つめる力（学びに向かう力・人間性等）・学習を通して自分と社会のつながりに気付き自己理解や将来への展望へつなげる

（３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

探究的な学習の単元開発をするために，主体的な学びの手立ての１つとなる本質的な問いを基にした単元構想について研修し，学年ごとに１単元の構想シートを作成し授業実践を行った。探究課題はＳＤＧｓの行動目標と関連付けて設定し，課題解決と実社会のつながりを意識させた。また，各教科においてもＳＤＧｓの目標を意識した教材研究を行い，学習の際には行動目標のアイコンを用いて意識づけを目指した。

また，本校では日常の取組として，児童生徒が「振り返りの手引き」を用いて毎時間の授業を振り返ることで，自分の学びの成果を自覚できる指導方法に取り組んできた。そこで，探究的な学習においても振り返りの場面を設定し，自分の思いや考えを整理したり解決の見通しをもたせたりすることを大切にするようにした。そのために，教職員で振り返りの意義や指導のポイントを研修で学び，共通認識をもって指導に取り組んだ。

日常の取組である学期に１回の「授業見合おう週間」（教職員が異校種・異学年の授業を参観し，児童生徒の主体的に学ぶ姿から指導の工夫や振り返りの実際を学ぶ）も授業改善の方法の１つとして継続している。

【小中連携の取組】【資質・能力の評価】

おもてなし力・伝える力・見つめる力について，９年間の継続的な取組をすすめるために，発達段階に応じて３段階（小学１年～４年，５年～中学１年，中学２・３年）の目指す姿を描いた資質・能力の系統表を策定した。系統表をもとに，単元構想時に目標・内容から付けたい資質・能力の評価規準とルーブリックを作成した。ルーブリックは，児童生徒の目指す姿が表れているか評価する拠り所とするだけでなく，発達段階に応じて，児童生徒に提示し，目指す姿の指標とした。

また，授業研究では，参観の職員も実際の児童生徒の姿をルーブリックに照らして見取り，評価の妥当性を検討した。

３　実践事例

（１）小学校第３学年

「昔のくらし，これからのくらし～もっと知りたい宮島～」

単元構想　〔キーワード：地域人材の活用〕

・本質的な問い「私たちが住んでいる地域をよりよい未来にするためには，何をしたらよいだろうか。」
・単元を貫く問い「今の自分のくらしに昔のくらしは何を教えてくれるのかな。」
・祖父母から聞いた昔の生活についての情報を交流するなかで，児童が新たな疑問をもてるよう工夫した。そのため，知りたい内容を学校・遊び・くらし・道具（もの）に分類し，地域の人にインタビューする活動を行う。児童は，宮島歴史民俗資料館の見学，学芸員さんや地域の方から話を聞くなど様々な人の考えに触れ，人々の知恵や工夫を知り，今後の生活に取り入れたいことを見つけた。

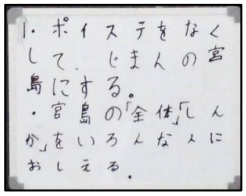
〔写真〕学芸員さん・宮島出身の前校長先生と対話する授業

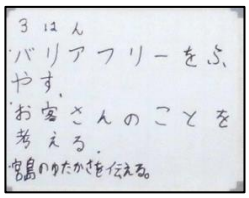
児童は，これまでの地域学習でお世話になった人を思い出し，自分達の知りたい昔の様子を手紙で尋ねることにした。得た回答やゲストティーチャーとして招いた人と一緒に対話するなど，人との関わり合いから学ぶことで，昔の様子を当時の人の思いとともに知ることができた。

児童は，昔のよさとして，自然のものを使った遊び・ものを自分で作り大事にする・協力することなどを挙げ「自分ももっと手伝いをしたい。」など，自分の生活にも取り入れようとしていた。

また，まちの発展は「お客さんにも島に来てほしい。」という人々の願いが今も昔も変わらずにあることに気付き，これからの宮島のまちに自分たちができることを考えた。

学習のまとめとして，今と昔の比較から分かったこと・考えたことを報告する会を企画した。（実際は参観日が中止になり，公共施設に展示し意見をもらうことになった。）





〔写真〕今と昔の宮島を知り，これからの宮島を描いた意見

３学年の本単元と中学２年の観光地宮島を切り口とした「宮島を紹介しよう」は，まちの豊かさを知る・まちの未来を考えるというＳＤＧｓの行動目標11でつながる。児童生徒は９年間の学びの中で，さらなる本質的な問い「10年後の宮島はどうあるべきか。」を問い続けていくことになる。

（２）中学校第２学年

「宮島を紹介しよう～世界遺産宮島の名所を発信！～」

単元構想　〔キーワード：ルーブリック・振り返り〕
・本質的な問い「日本屈指の観光地であり続けるためには？」
・単元を貫く問い
「宮島学園の生徒だからこそできる宮島ガイドはないだろうか。」
・宮島観光の現状を知り，「宮島のよさを伝え，リピーターを増やしたい。」と願い，これまで積み重ねてきた宮島学習を生かし，宮島中学校の生徒ならではの観光ガイドを目指す。つけたい力のルーブリックを生徒に提示し，ルーブリックを意識した振り返りを行わせ，生徒の主体性の向上を図る。

〔写真〕生徒が旅行者の求めに応じてガイドをする姿

生徒は，伝える力のルーブリックＡ「観光者の反応を確かめながら，目的・意図に応じて名所を分かりやすく案内する」ことを目標にガイドを行い，自分の活動を次のように振り返ることができた。

・紅葉谷について説明したとき，相手を意識してアイコンタクトをとった。基本的な情報を伝えた後，おすすめの写真の撮り方を伝えることができた。

また，生徒は１～２組のガイドを終えるとグループでガイド活動への相互評価を行った。そこでは，急いでいる旅行者への対応や目的地までのルート説明など，ガイドで困ったことを話し合い，次のガイドではどのように対応するかを検討していた。
振り返りから次の課題解決に向け見通しをもつ姿の現れといえる。

（写真）振り返りをもとに次の活動の見通しをもつ姿

また，ガイドの様子を参観した教職員は，ルーブリックに照らして生徒の姿を見取った。「改修で大鳥居が見られないと残念がる旅行者に『何年ぶりの改修だと思いますか。』と投げかけて，今だからこその見所を伝えていたのでＡと判断した。」など，ルーブリックの妥当性の検討，見取り方を共有することができた。

４　研究の成果と課題等

（１）成果

単元構想シート作成により，目標・活動・評価を一体的に扱うことで，指導者は学習の目的や意義が明確になった。
ルーブリックの作成・試行とともに，授業研究で評価の妥当性を検討することで，指導者は評価の仕方を共有することができた。また，ルーブリックを児童生徒に示すことで，児童生徒は自分の目標を設定し意欲向上につながった。
資質・能力に関する項目について調べた次の３点は，達成目標（80%）を上回った。

指標	数値	検証方法
「宮島のことを誇りに思い，他者に伝えたい。」児童生徒の割合　（おもてなし力）	87%	学校評価アンケート
筋道を立てて伝えることができる児童生徒の割合　（伝える力）	89%	単元の学習成果物等
自分の将来について考えようとしている児童生徒の割合　（見つめる力）	80%	振り返りシートの記述

（２）課題

児童生徒は学習の振り返りが授業理解に役立っていると感じている（77%）が，振り返りから次の課題につなげるような単元展開は不十分であった。また，指導者がＳＤＧｓの視点で宮島のまちを見つめ，児童生徒に提示する課題を他教科等との学びと関係付けたものにするには，教材研究がより一層必要になる。

指標	数値	検証方法
「授業のふりかえりで，新しい課題（やりたいこと）を見つけています。」という児童生徒の割合	66%	学校評価アンケート
「教科の授業等で，ＳＤＧｓの目標を意識した教材研究をしている。」教職員の割合	62%	学校評価アンケート

（３）今後の改善方策等

振り返りの質の向上を図るために，振り返りの視点を示すだけでなく，個人の振り返りを集団で共有し課題設定に用いるなど，振り返りを活用することで学びを深めていく必要がある。
また，伝える力を付けるために，児童生徒が切実に伝えたいという思いをもった内容が相手に伝わったという経験を積まなければならない。双方向の発信の場を設定した単元展開を工夫するとともに検証方法についても検討していく。さらに，生活科・総合的な学習の時間のカリキュラムを再構築し，児童生徒の学びをつなげ，９年間を通して資質・能力を育成していきたい。